

光といのち

第100号
2016年5月1日発行

発行所
真宗大谷派勝善寺
〒299-2214
千葉県南房総市二部1344
電話 0470-57-2657
FAX 0470-57-2290
Eメールino-teyy@khaki.plala.or.jp
URLhttp://syozenji.or.jp/
住職 釋孝昌(井上孝昌)

ひかりといのち
きわみなき
阿弥陀ほとけを
仰がなん
『和訳正信偈』

まばゆいばかりの緑の季節になりました。

皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

さて、この寺報も当号で節目の100号を迎えました。

先々代釋義昌(第28代住職)が1952(昭和27)年正月に『勝善寺寺報』として発行したのが始まりでした。そこには「寺報発行について」という題で「本年度から時々(年二、三回の予定)寺報を発行して色々なことをお知らせし、当寺と檀信徒の



1965 (昭和40)年以前



1965 (昭和40)年以後

方々との連絡に役立つようにしたいと思ひ、ここに第一号を発行して御目にかけます。御一読くださいますれば誠に幸いと存じます。 義昌」とあります。

1978(昭和53)年まで28回(号数は三号から記してない)謄写版刷りで発行されています。『光といのち』という名前は、1964(昭和39)年に初めて使われ、翌年は『慈光』となり、次の年には『光といのち』に戻り現在に至っています。

先代釋純昌(第29代住職)は、1973(昭和53)年に住職に就任すると、寺報『光といのち』を改めて第1号として発行し、「毎年お正月だけに発行しておりました寺報『光といのち』を、今年からこのように印刷にして、お盆にも発行することになりま

した。」と記しています。当号は、そこから100号目となります。2010(平成22)年お盆号からは年6回発行に、翌年5月号からは寺にある複合機でのカラー刷りになりました。「当寺と檀信徒の方々との連絡に役立つようにしたい」と第一号にありましたが、ご門徒の皆さまに「寺のこと」を知っていただきという気持ちは今も同様です。「御一読くださいますれば誠に幸いと存じます。」 釋孝昌

題字下の言葉は、『正信偈』の「帰命無量寿如来 南無不可思議光(如来)」の二句の和訳です。無量の寿命(いのち)と無量の光明(はたらき)である阿弥陀仏への帰敬(ききょう)を、親鸞聖人が述べている部分です。これは浄土真宗の信心、すなわち私たちの信心でもあります。そして、全人類が平等に救われる大道です。

言うまでもないことですが、当寺の寺報『光といのち』は、ここから名付けたものです。お釈迦さまがお説きなさった

この信心は、龍樹菩薩・天親菩薩・曇鸞大師・道綽禪師・善導大師・源信僧都・源空(法然)上人の七高僧から親鸞聖人へ、さらに蓮如上人と伝えられました。

当寺の開基永範(明空)は、その信心に触れ、当寺を浄土真宗に改宗したと伝えられています。その後、綿々とご門徒の皆さまによりこの信心は相続され、現在に至りました。ですから私たちに、次の世代にこの信心、浄土真宗を伝えていく責任と使命があります。

そして、そのことは私たち一人ひとりが仏法を聴聞し信心獲得(ぎやくとく)すること、果たされるのでしよう。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏：



釋義昌 69歳

釋純昌 46歳

本堂屋根瓦葺き替え落成記念写真より
1965(昭和40)年3月28日撮影

絵本『おしゃかさま』

東願寺出版部

前回は、お釈迦さまの誕生から出家までを掲載しました。

今回は、苦行・降魔・成道・転法輪・涅槃・仏教の伝播です。

読みやすくするために適宜ひらがなを漢字に改め章題を付けました。

苦行（くぎよう）

太子は、いろんな仙人にいろんな修行を習いました。何にも考えない何も思わない「行」。一粒の米一粒の胡麻で一日を過ごす「行」。長い間息を止めて死ぬ少し前まで我慢する「行」。身体を逆さ吊りにしたリトゲのある木の上に座る「行」。そんな苦しい「行」を毎日続けました。

やがて六年が過ぎました。身体は痩せ衰え、今にも倒れそうになりました。「これではいけない。人間を幸せにする本当の道は、こんな「行」では見つからない。」と太子は一人で森を出ました。

降魔（じょうま）

森を出た太子は 川の近くの草原で横になりました。

「おや 人がたおれている。」

そばを通った村のむすめスジャータは、びっくりして持っていた乳粥（ちちがゆ）を飲ませました。

森の中から、これを見ていた五人の家来は「太子は修行をあきらめた。いっしょにいてもしかたがない。」と去っていきました。

乳粥（ちちがゆ）のおかげで元気をとりもどした太子は、川の水で身体を洗い近くの丘の大きな「菩提樹（ぼだいじゆ）」の根元とに座りました。

そこで、目をとじて膝の上で手を組み深く自分の心を見つめる修行に入りました。人間の心の中には、たくさんの悪魔が住んでいます。

「やい、太子。おれを知っているか。おれは人間を心配させる悪魔だ。」

「おれは人間を困らせる悪魔だ。」

「おれは人間を欲張りにする悪魔だ。」

「わたしは人間を迷わせるのよ。」

「悪魔」「悪魔」「悪魔」……

「みんな悪魔の宮殿の兵隊なのだ。アッ

ハッハッハッ……」

悪魔たちは、姿を変え形を変え夜といわず昼といわず攻めたてました。

目を閉じ座ったままピクリとも動かない心と身体。

悪魔たちは、怖ろしい武器を持って大きな牙をむき、毒蛇を口から吐き出し火や煙を吐きながら太子の心の中に突進してきます。そうかと思うと

「もう、やめたらどう。」

誘惑の悪魔がきれいな女の姿となって邪魔をしようとします。それでも太子の心と体はまったく動きません。

悪魔たちは、焦りながら最後の突撃をしました。

その時です。太子の身体は金色の光に輝き大きな音がしたかと思うと、あたりは真っ暗になりました。

闇の中で悪魔の宮殿が赤々と燃え、悪魔たちの馬も象も車も地面に倒れ、悪魔たちの姿はどこかへ消えてしまいました。

成道（じょうどう）

あれから何日たったでしょう。太子は、膝の上に組んだ両手を静かにゆるめまし

た。そして、長い眠りから覚めたように明るい気持ちでそつと目を開きました。

東の空に低く夜明けを上げる星がキラキラとまたたいていました。

「いままでのわたしではない。人間を幸せにする本当の道を見つけたのだ。」

このときからシツダルタ太子を『お釈迦さま』（ブツダ）とお呼びするようになりました。

人間の悩みや苦しみの元になる心の悪魔を断ち切ったお釈迦さまの姿には、誰もが思わず手を合わせたくなるような尊い光があふれていました。

その時お釈迦さまは三十五才。十二月八日の朝は、静かに日の出を迎えようとしていました。

転法輪（てんぽうりん）

「わたしが見つけた本当の智慧は、わたし一人のものであつてはならない。」

お釈迦さまは、そこを発ち五人の家来が修行している「鹿野園（ろくやおん）」というところを訪ねました。

お釈迦さまの姿が近づくと五人は「修行を棄てた太子なんかには用はない。」と知ら

ないふりをしました。

でも目の前に立つたお釈迦さまを見ると、もうじつとしていられません。一人立ち二人立ち、みんなが頭を下げてお迎えしました。

「苦しい修行をした自分たちよりすぐれた智慧の光がさしている。どうしたことだ。」

五人は手を合わせました。お釈迦さまは、静かに口を開きました。

「欲を棄てなさい。苦しい修行だけではだめです。正しくものを見なさい。」

五人は、お釈迦さまの最初のお弟子になりました。

お釈迦さまの話しを聞こうとたくさんの人々がお弟子になりました。お釈迦さまのお子たちやおばさまの子も、そして、あ得意地悪のダイバダツタも。金持ちの人も貧しい人も、物忘れの名人も乱暴な男も、お釈迦さまは、みんな同じように愛され、みんなにわかるまで何回も何回もお話をつづけられました。

涅槃（ねはん）

そして、八十才の時クシナガラ川のそ

ばのサーラの林の木の下で多くのお弟子たちに見まもられながら静かにお亡くなりになりました。

「わたしが教えたことを わたしと思え。わたしはいつでも どこでも みんなの心の中に生きつづけるだろう。」

二月十五日のことです。月がうつくしくあたりを照らしていました。

仏教の伝播（でんぱ）

お釈迦さまの教えは、インドはもちろんヒマラヤの麓の険しい山道や砂漠を越えて旅をする人たちによって東へ西へ。山を越え海を越えて北へ南へと広がっていきました。

そして日本にも今から千三百年前に「佛教」が伝わりました。

そして、たくさんのお寺ができ尊いお坊さまが次つぎとお釈迦様の教えを広められました。

今わたしたちは「南無阿弥陀仏」と仏さまのお名前をお呼びします。

その時、みんなの心の中にお釈迦さまは、清く正しく平和のみ光を灯（とも）し続けていらつしやるのです。

千葉組合同研修会



4月18日(月)〜19日(火)に鴨川ヒルズリゾートホテルで、僧侶と門徒の合同研修会が開催され県内12ヶ寺から42名の参加がありました。

当寺からは写真右側から関口昌司氏川名喜昭氏住職田村晋一氏大胡登美子氏の5名が参加しました。田村氏には、「これからの寺のあり方」というテーマにそって、寺との関わりから同朋会運動を知り、昨年「塚原講」という聞法会を結成したことなどを発表していただきました。



また、組長として私は、第一生命経済研究所というシンクタンクの研究員である小谷みどり氏の「変わる葬儀―寺・僧侶に求められるもの―」という講演の一部(下記)を参加者に紹介しました。

変わる葬儀

―寺・僧侶に求められるもの―

近所のお寺や菩提寺でどんなことがおこなわれていたら行ってみたいかときいたところ、一番多い回答は、「お坊さんの法話を聞いてみたい」でした。落語や音楽会などのイベントをするお寺が増えていきます。こうしたイベントをすれば人が集まるので成功した気分になるのですが、その人たちはお寺のリピーターになるでしょうか。イベントでお寺に行ったのを機に、浄土真宗に興味をもってくれるでしょうか。その可能性は極めて少ないといわざるを得ません。世間の人たちで一番多いニーズは、僧侶の法話を聞いてみたいという事なのです。これはお寺に行かないと聞けないわけです。お寺でしかできないことを望んでいるのです。落語や音楽会はお寺でなくても行けるのです。

※同朋会運動は、「生まれた意義と生きる喜び」を、仏法をよりどころに生きることで、一人ひとりがいただいていく信仰運動です。

親鸞教室

海法龍先生のお話しを聞き、座談会で話し合います。

同じ話しを聞いても受け止め方が各自に違いおもしろいです。

日時 五月十九日(木)

十二時半〜 受付

十三時〜十六時

場所 勝善寺

参加費 千円

持ち物 念珠 門徒章 筆記用具

※準備の都合上、五月十二日までにお申し出ください。

東京教区同朋大会

日時 六月三日(金)

場所 文京区シビックホール

富楽里に十時に集合し十八時ごろ帰着します。

参加する方は、五月二十七日までにお申し出ください。

千葉組婦人研修会

日時 六月十日(金)

場所 市川市即随寺

参加ご希望の方は、五月中にお申し出ください。

新盆(初盆)

大切な方を亡くし、初めての盆を迎える方、日時・お飾り等について、早めにご相談ください。大切な仏事です。



真宗大谷派の切子灯籠です。

行事予定

毎月曜日6時30分〜お勤め練習

5月8日14時〜 同朋の会

5月19日 親鸞教室

6月3日 東京教区同朋大会

6月5日9時〜 八日講十日講

6月10日 同朋の会

6月14日 婦人研修会

6月15日 千葉組同朋総会

6月26日8時30分〜 奉仕作業

7月17日14時〜 同朋の会

8月10日10時〜 孟蘭盆会

9月22日10時〜 秋彼岸会

10月9日14時〜 同朋の会

10月23日13時30分〜 世話人総会

11月15日13時30分〜 仏具磨き

11月18日 報恩講 準備 速夜

11月19日 報恩講 晨朝・日中

※・・・以外は当寺が会場です。